

種名	チガヤ <i>Imperata cylindrica</i>				
					
分類	被子植物単子葉類イネ科	俗称	ツバナ	生活型	多年草、直立型
分布	ユーラシア大陸、アフリカ大陸の暖帯に広く分布する種で、日本全土に分布する。				
形態	根：根茎は白く、地中を長く這う。 茎：4月頃発芽して成長、茎はやや細く、直立して高さ 30～80 cm になる。 葉：葉は長い線形で長さ 20～50 cm、幅 7～12 mm、緑褐色でやや堅く、下部は狭まって葉柄のようになる。 葉鞘には通常毛があり、基部は褐色で古いものは繊維状になる。 花：花期は 4～6 月。葉が出る頃に穂を出す。果穂は円柱状で長さ 10～20 cm、白い長毛に囲まれ、枝は短い。小穂は長さ約 4 mm、両生で、総の中軸の関節に 2 個ずつつく。				
類似種	河原や土手で、5～6月に銀白色の穂が揺れるようなイネ科植物は他にないので、間違えることはない。				
生息場所	河原や堤防の法面、海浜、畑の畦道などに群生する。陽当たりのよい乾いた草地、特に砂質地に多い。				
繁殖	繁殖は主に地中を長く這う地下茎（根茎）によって行なわれ、その節々から先の鋭い線形の葉を出して群生する。 4～6月に花穂を出し、結実する。果実は穎果とよばれる小型の乾果で芒はなく、果皮は膜質で薄い。熟すると基盤の白い長毛とともに総から脱落し、風で飛散する。				
他生物との関係	ヒメウラナミジャノメ、キマダラモドキ、ウスイロコマチョウ、ギンイチモンジセセリ、イチモンジセセリ、チャバネセセリ、ユウレイセセリなど、多くの蝶類の食草となる。 セッカなどの鳥類の営巣や生息の場となるほか、昆虫類や小動物の生活の場ともなっている。				
配慮のポイント	チガヤの草原には多くの昆虫や鳥が依存しているので、草刈り、火入れなどの管理を行なう際には時期や頻度に配慮して、生物の生息に影響を及ぼさないようにする。				
トピック	○根は茅根とよばれ、漢方薬（利尿薬）として利用される。 ○最近では、堤防の法面保護のためにチガヤを用いることも検討されている。				
その他					
引用文献：『川の生物図鑑』を改変					